

Anna HALPRIN with Rachel KAPLAN
Making Dances That Matter:
Resources for Community Creativity.

福本 まあや

著者アンナ・ハルプリンは米国西海岸を拠点とする前衛舞踊家であり、コミュニティダンス・アーティストであり治療者である。1950年代後半よりサンフランシスコ・ダンサーズ・ワークショップにおける先駆的な舞踊実験を通して、S.フォルティ、T.ブラウン、Y.レイナーらに多大な影響を与えた。「市民のために踊るのではなく、市民とともに踊りたい」として、舞台を劇場から街中へ、そして自然の中へと展開した。どの時期の活動に焦点をあてるかでハルプリン像は異なるかもしれない。が、本書を通して、彼女の根底にある信念と探求は「舞踊の力」と「芸術としての昇華」に一貫していることが読み取れる。ハルプリンは、夫で建築家のローレンス・ハルプリンを始め多くの芸術家との交流でも知られる。本書の随所に掲載された写真やイラストのグラフィック性の高さからも彼女の偉業が多くの芸術家との共同作業から生まれてきたことが分かる。

本書の序には、「あなたやあなたの共同体、そして我々の世界が直面するどんな重要なテーマにも適用できるダンス・リチュアルを創り出すために用いられ得る思想とプロセスを提示すること、それが本書の意図である」とある。本書の構成は、序、1. ライフ/アートのプロセス：重要なダンスを創ることへのアプローチ、2. サークル・ジ・アースとプラネタリー・ダンスの歴史、3. サークル・ジ・アース、4. プラネタリー・ダンス、5. 結論：それとともに走る、となっている。

1には、日常のあらゆる動きがダンスの動きとなる、とするハルプリンの手法上の考え方や原理が書かれている。2には2つのダンスの枠組みがどの時期にどういう発見をしながら進化してきたかという経緯が記されている。3には9日間にわたる「サークル・ジ・アース」という活動の方法が紹介されている。例えば第1日目：コミュニティの始まりには6つの具体的な活動が紹介され、それぞれの意図、要する時間、使用するスコア、活動内容、活動するに適した場所が箇条書きに挙げられ、この活動でどういうことが生じたかの説明が続く。4は「プラネタリー・ダンス」についての同様の説明である。世界各国で踊られた記録や報告があり、舞踊家川村浪子が日本で実施した様子を伝える手紙の掲載もまた見られる。

全編を通して随所に、ハルプリンの関心や考え方を示したテキストやエピソードがコラムのように挿入され、これらを拾い読みするだけでも興味深い。

ハルプリンは本書以前に数冊の本を出版してきた。既出のインタビュー記事が主に集められた1999年の著書『Moving Toward Life』(編者はR. Kaplan)にも「サークル・ジ・アース」と「プラネタリー・ダンス」に関する記述は見られたが、多少情報が雑多な感があった。本書は、その実際の方法やそこでハルプリンが直面してきた問いや思想が、方法論上の分かりやすさと

臨場感を損なうことなく読みやすくまとめられている。

舞踊家自身の著書であるという点で米国の舞踊芸術家の思想や手法に関心のある学会員を始め、ダンスセラピーやコミュニティダンス、舞踊教育や文化政策と関わる方にもお勧めしたい。

(Wesleyan University Press, 2019年3月刊行)

Susan MANNING, Janice ROSS and
Rebecca SCHNEIDER (eds.)
Futures of Dance Studies

武藤 大祐

主にアメリカの、新進の舞踊研究者たち(ポストドクから講師、准教授までのearly-career scholars)による28本の論考を集めた大部の論文集である。「アーカイヴ」「欲望」「場」「政治」「経済」「技巧」「流通」の七部構成で、旧約聖書から近現代まで多岐に渡る歴史/地域研究と、身体論や民族誌など理論的研究の要素が織り交ざる。

アメリカでは2017年にCongress on Research in Dance (CORD, 1964年創設)とSociety of Dance History Scholars (SDHS, 1978年創設)が統合され、Dance Studies Association (DSA) が生まれたが、この大規模な学会再編と相前後して、アンドリュウ・メロン財団が人文科学的な舞踊研究への支援に乗り出し、Dance Studies in/and the Humanitiesと題するプロジェクトを展開した(2012~18年)。その一環として、編者の三人は新進研究者を対象に夏期セミナーを開き、参加者は各自の研究成果を共有するとともに、舞踊研究を学術分野として強化するための戦略を議論したという(5)。本書はこのセミナーを基盤として編まれた。

ところで編者によれば、寄稿者のうち舞踊専攻は30%に満たない。40%が演劇・パフォーマンス研究専攻、その他はアフリカン・ディアスポラ研究、人類学、英文学、歴史学、音楽学、宗教学、視覚文化研究などである(5)。これは裏を返せば、「舞踊」が多様な学術領域に共有される研究対象であり、異質な知見が流れ込む豊饒な坩堝でもあることを示している。日本でも舞踊のそうした性質に違いはないはずだが、おそらく「パフォーマンス研究」というパラダイムがアメリカの研究者たちを活気づけている。本書においても、*Performing Remains* (2011)で知られるシュナイダーが編者に名を連ねているのが象徴的である。

編者も認めるように、アメリカの舞踊研究は高等教育におけるモダンダンスの実技に付随するものとして始まったため、依然モダンダンス研究が大きな比重を占め(5)、またこの論集も参加型の舞踊より劇場舞踊の研究に軸足を置く(11n6)。とはいえ、キャサリン・ダナム研究で高い評価を得たJoanna Dee Dasや、同じくアクラム・カーン研究のRoyona Mitraなど、既に活躍中の論者も含みつつ、寄稿者の大部分が今後を囑望される存在であって、英語圏の舞踊研究の層の厚さを実感させる一冊である。目次はウェブで確認できる。

(Wisconsin University Press, 2020年1月刊行)